

ポピュラー音楽研究から
「大衆文化の地理学」
の射程を考える

山田 晴通(東京経済大学)

yamada@tku.ac.jp

日本地理学会

大衆文化の地理学研究グループ

都市社会地理研究グループ研究集会

日本大学文理学部 2015.03.29.

本発表の課題

- 本発表は、発表者が1980年代末から関心を寄せ、身を置いてきた「**ポピュラー音楽研究**」の日本における経験を紹介し、それを踏まえて、「**大衆文化の地理学**」という課題の立て方が、どのような射程の可能性をもっているのかを、(現にどのような研究が行われてきたのか/いるのか、という状況認識にとらわれない形で)捉え直そうとするものである。

発表者の関心の所在

1990年前後：ビデオ・クリップへの関心。

- 1988年「ヤヌスの都市－日英のビデオ・クリップにみる《香港》のイメージ－」
- 1990年「ビデオ・クリップが描く盛り場の若者たち－BOOWY『季節が君だけを変える』を読む－」
- 1991年「ビデオ・クリップに描かれた「アジア」－1983年前後におけるイギリスのビデオから」

発表者の関心の所在

1990年代以降：**ジェンダー論への関心**.

- 1999年「globe:小室哲哉の歌詞が描き出す世界」
- (学会発表のみ)「小室哲哉の歌詞から考える〈華原朋美〉の物語」
- 2004年「ビデオ・クリップにみる都市の中の女性の場所」

発表者の関心の所在

1990年代以降：**バートン・クレーンへの関心**

- 2002年「バートン・クレーン覚書」
- 2008年「バートン・クレーン補遺(1) —生い立ち, 最初の日本滞在(1926-1936), 帰国から日米開戦前まで—」
- **現状では<中断>状態**

発表者の関心の所在

2010年代: ローカリティの物象化への関心.

- 2012年「規模と立地からみた米国のポピュラー音楽系博物館等展示施設の諸類型」
- 2013年「立地からみた日本のポピュラー音楽系博物館等展示施設の諸類型」
- 2013年「地名の使用にみる音楽のローカルアイデンティティの諸相 ポピュラー音楽における事例を中心に」

発表者の関心の所在

- 発表者のポピュラー音楽への関心は、周縁的
- 他方では、 授業する機会が長くあった。
- 1993年度「ポピュラー音楽概論」明治学院大
- 1996, 1999, 2005年度-特別講義 東経大
- 1998年度-2006年度(中断あり)国立音楽大
- 2003年度-「音楽史」青山学院大

発表者の関心の所在

- 発表者のポピュラー音楽への関心は、周縁的
- 他方では、 授業する機会が長くあった。
- 2003年「**ポピュラー音楽の複雑性**」
東谷 護, 編『ポピュラー音楽へのまなざし』
勁草書房, pp.3-26. →**配布資料**

『ポピュラー音楽へのまなざし』

- 2003年
- 東谷護(b.1965)・編
の論文集
- 大学教科書、
「卒論指導のお手本」
を意図した初期の試み

日本におけるPM研究の制度化

- 音楽ジャーナリズムへの
アカデミズム的言説の介入



音楽ジャーナリズムの衰退と
凡庸なアカデミズムへの包摂

『ポピュラー音楽とアカデミズム』

- 2005年
- 三井徹の退職記念論文集

日本におけるPM研究の制度化

- 小泉 文夫(1927 - 1983)
『歌謡曲の構造』(1984)
- 見田 宗介(b.1937)
『近代日本の心情の歴史
- 流行歌の社会心理史』(1967)
ちなみに...中村 とうよう(1932-2011)
江波戸 昭(1932-2012)

日本におけるPM研究の制度化

- 三井 徹 (b.1940)
- 小川 博司 (b.1952)
『音楽する社会』(1988)
- 細川 周平 (b.1955)
『音楽の記号論』(1981)
『ウォークマンの修辞学』(1981)
『レコードの美学』(1990)

日本におけるPM研究の制度化

- IASPM(1981創設)
- JASPM(1989準備会:1990創設)

山田が入会したのは1990年の設立大会
事務局(1996-2000)、会長(2004-2006)

JASPM設立以降、制度化は着実に進行?

『ポピュラー音楽の社会経済学』

- 2013年
- 高増明(b.1954)・編著
- 大学教科書らしい体裁

JASPMに拠る研究者の例

- 毛利 嘉孝 (b.1963)
『ポピュラー音楽と資本主義』(2007)
- 東谷 護 (b.1965)
『進駐軍クラブから歌謡曲へ—戦後日本ポピュラー音楽の黎明期』(2005)
- 大和田 俊之 (b.1970)
『アメリカ音楽史 ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで』(2011)

JASPMに拠る研究者の例

- 増田 聡 (b.1971)、谷口 文和 (b.1977)
『音楽未来形—デジタル時代の音楽文化のゆくえ』(2005)
- 輪島 裕介 (b.1974)
『創られた「日本の心」神話「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史』(2010)
- 井手口 彰典 (b.1978)
『同人音楽とその周辺』(2012)

JASPMに拠らない研究

- JASPMに関わりのない所でPM研究に取り組むことは、少なからずリスクを負う状況
- 蓄積されてきた既存研究の文脈、研究のトレンドを無視してアカデミックなスタイルの議論をすることは危うい

PM研究の視座

- 当然、多様なものがある
- カルチュラル・スタディーズ(CS)を通過
- コミュニケーション論、メディア史的議論が不可欠
- 同時に「美的経験の枠」といった議論も

PM研究の視座

- カルチュラル・スタディーズ(CS)を通過
- かつての Listen & think 的議論の限界を突破する手法のひとつとして、フィールドワークを指向するトレンドがある
- 「下部構造」への視座
地理学への(幻想を含んだ過剰な)期待

PM研究の視座

- コミュニケーション論、メディア史的議論が不可欠
- Popular/mass であることは、大量複製技術に依拠すること、mediated であることが本質

インフラの議論が避けて通れない

大衆文化の地理学

- 「大衆文化の地理学」という問題設定
- ポピュラー音楽研究が、実証性をもった社会科学の議論を展開しようとする限り、地理学はその重要な一翼を担うことが期待される。
- 対象を音楽に限らない「大衆文化研究/ポピュラー文化研究/メディア文化研究」でも同じ。

大衆文化の地理学

- 大量複製技術が社会の中で機能する「下部構造」を実証的に把握する努力には、(広義の)フィールドワークが有効な手法。
- メディアに関わる現象が、本質的に「没場所性」を指向するものであればこそ、側面として見落とされがちな、そこに潜む「場所性」に注目する意義があり、「ユビキタス」が目指されればこそ、「空間性」を論じる意義がある。

都市社会地理学

- 都市とメディアの親和性
- メディアとしての都市
- 「農村」と対置される「都市」ではなく、
「農村」をも呑み込む現代社会における生活
様式の「都市化」こそが検討されるべき対象
→メディア化、情報化、デジタル化
- 「伝統社会/文化」に対置する「現代社会/文化」

メディア空間文化論

- Burgess & Gold (1985)
- 竹内啓一(1932-2005)・監訳『メディア空間文化論—メディアと大衆文化の地理学』(1992)

ちなみに...中村 とうよう(1932-2011)

江波戸 昭(1932-2012)

種を蒔いたのはこの世代だったような気が...

別テーマの雑文から

先日、初めて出席した会員総会には、研究者を業（なりわい）とする会員が何人も参加していた。その大半は、他地域の生活者である。これは、日本の社会環境の中でNPO法人が運営するコミュニティ放送が成立するのか、という重大な社会実験に立ち会いたいという研究者の業（ごう）なのか、先進的な取り組みを応援したいという研究者の姿をした活動家の情熱が成せる業（わざ）なのか。おそらくは、その両者が渾然一体となった結果なのだろう。（京都三条ラジオカフェ パンフレット 2013）

文化研究への戒め

- 対象への没入/客観化の往還が不可欠
対象への共感と違和感を大切に
- 地に足をつけたフィールドワークが出発点
それができない場合は、危うさを自覚せよ